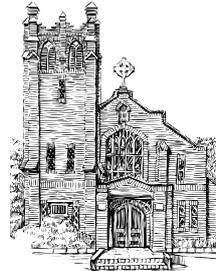
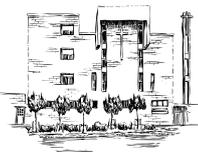


日本聖公会

大阪教区報



大阪城南キリスト教会

恵我之荘聖マタイ教会

大阪聖愛教会

主教座聖堂 川口基督教会

日本聖公会
大阪教区総務局

〒545-0053

大阪市阿倍野区

松崎町2-1-8

TEL 06-6621-2179

FAX 06-6621-3097

発行責任者

総務局長 司祭 内田 望

+++++ 第504号 2022年11月20日発行 +++++

小さな声を聞く

司祭

アモス

金キム

頭ドウ

昇シヨウ

「それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」
ルカによる福音書

24章10-11節

毎週私たちは聖餐を通してキリストの復活を記念し、私たちの復活を祝福しています。キリスト教を言い換えれば、イエス様の復活を信じる信仰です。イエス様が復活されたように私たちも復活するという信仰です。(1コリント15・13-23)

復活の記憶と希望が私たちの時代に辿り着くまで、どれほどの人々の人生があったのでしょうか。ルカによる福音書に登場したこの女性たちの口から弟子たちへ、これらの弟子たちから信者たちへ、そ



して受け継いだ信者たちが、時間と空間の隔たりをはるかに超えて、今、私たちにまで、復活の福音は継承されてきました。

ルカによると、この女性は

耳を傾けて信じるのは、信用できて地位や力のある人の言葉です。しかし、復活の最初の証人である女性の声は小さく、弱くて、人々が耳を傾けてくれない小さな声でした。

教会がこの世に立てられた理由の一つは、小さくて弱い人を呼び起こすためです。権力があり、お金があり、地位のある人々が集まるためではありません。今の時代、教会

はいろいろ問題もあつて信頼を失っていったかもしれません。だが、教会は相変わらず復活を信じて小さくて弱い声の運命を見据え、支えてきました。それは、復活の神祕は小さな声に耳を傾けることから始まるからかもしれません。

復活を信じるキリスト者である私たちは、誰の言葉を聞いて生きていくのでしょうか。復活の祝福は、私たちが見過ごしている声から始まります。復活の喜びは、私たちが無視して耳を閉じてしまつたそこから出発します。まず、それは私の中の小さな

な声、自分の泣き声を聞くことから始まります。これまで自分が無視して隠したいと思つていた傷や痛みを聞くということ。復活したキリストは弟子たちに現れて、自分の手と脇の傷を見せてくれます(ヨハネ20・27)。
次は、私たちの共同体と、私たちが生きるこの世界にある傷と苦しみの声に耳を傾けること。大阪のあちこちに、声さえ出せずに苦しんでいる人がたくさんいます。貧困の傷の前に、差別の苦しみの前に、虚無の絶望の前に追い込まれた人々の声が聞こえてきます。その呼ばわる声は「わたしたちの主イエス・キリストはよみがえられた。」

(大韓聖公会ソウル教区から
大阪教区へ出向中。
牧会、研修中)

※アモス金頭昇司祭は2022年4月より、同志社大学での勉強のため来阪し、来年4月より同大学の大学院神学科に入学を予定しています。現在はガブリエル教会にお住まいいただき、大阪教区にご協力くださっています。

2022大阪教区礼拝・聖公会生野センター 30周年記念感謝礼拝

司祭フランチェスコ 成岡 宏晃

「感謝を分かち合いたい」という呉光現総主事の想いからはじまり、聖公会生野センター30周年記念事業実行委員会の会合において聖公会生野センター30周年記念感謝礼拝を2022年10月10日に開催することが決定したのは、今から半年以上前のことであった。

その後、大阪教区宣教局で今年こそは対面での大阪教区礼拝をおささげすることができたらという願いが分かち合われたのは5月頃であった。この2つの礼拝を「合同」でおささげするという方針について、当初は疑問と葛藤が飛び交っていた。しかし、主のみ心を祈り求めながら、度重なる議論を交わして大阪教区教区成立100周年に向けて、新たな宣教の一步を踏み出すために聖公会生野センターの働きに心を寄せた。そして「福音宣教とは何たるかを改めて共に分かち合う礼拝をささげたい」という祈りが主に届けられ、2022年10月10日13時30分、プール学院メアリー

ズホールにて表題の礼拝をおささげすることがゆるされたことは、ただ感謝である。

説教者到大韓聖公会より李京浩議長主教をお迎えし、さらに来賓として大韓聖公会の教役者3人、青年約20人をお迎えするという奇跡のような出来事が起こった。

さらには、日本国内で働きを担われている韓国出身教役者の皆さま、各教区代表の皆さんをはじめ日本全国から多くの方が主の呼びかけに応え、大阪の地に集められ、350名の方と聖公会生野センター30年の感謝を分かち合うひと時が与えられ、礼拝後のパネルディスカッションも100名を超える参加者が興味深くこれまでの生野センターの働きに聞き入っていた。

日韓聖公会の歴史に深く携わってこられた、さまざまな「違い」を持つ多くの方々が全国から、韓国から、またカナダから集められた。また、年齢も3歳から90代までと幅広く、「そこにキリストは共

にいる」という礼拝のテーマを主が豊かに用いてくださったことの何よりの「しるし」であった。同時に、これほどに多くの方に祈られており、大切な宣教の器である聖公会生野センターが大

阪教区に与えられていくことの喜びを感じる礼拝でもあった。

李京浩主教は説教の中で「実は、韓国と日本は、一番近い国、隣国でありながら、一番難しく複雑な関係でした。両国の国民は、かつての辛い歴史によって、互いに憎しみあいながら過ごしてきました。そのような苦しい時代の中で、大韓聖公会と日本聖公会は



聖職団集合写真

キリストの愛による赦しと和解とを成し遂げて、多様な交流と宣教を目指して努力して参りました。今まで

日韓の両聖公会が取り組んできた和解と親交、宣教協働の働きは、多くの聖職と信徒の心に美しい福音の花を咲かせ、実を結んでいます。現在

大韓聖公会の聖職の皆様が、日本聖公会の各教区の教会で司牧に当たっていることこそ、最も大きい実りであると思います。」と語られた。

隣国にありながら一番難しく複雑な関係であり、互いに憎しみあいながら過ごした苦しい時代を超えて宣教と交流を実現させたのは他でもない「キリストの愛による赦しと和解」であったとい

うメッセージは、大阪教区にとどまらず、日本聖公会、アングリカンコミュニオン全体にも向けられるべき言葉であるように強く感じた。

礼拝の祭色は、「喜び」の「白」ではなく、「聖霊・殉教・炎」を表す「赤」とし、大阪教区教区成立100周年を目前に控え、「宣教とは」、「教会とは」、「礼拝とは」など、信仰生活を振り返り、新たな一步を踏み出す決意の礼拝として

ささげられていた。混迷を極める今の時代にあつて、主イエス・キリストの枝である教会が何を大切にし、何を決断していかなければならないのか、謙遜な心で神のみ言葉を聴き、主によって一つとなり、それぞれの生活の場へと派遣された、実り多き礼拝であったと信じている。

(式典長、プール学院中学校・高等学校チャプレン、大阪城南キリスト教会牧師) ※今年度の教区礼拝は321人が参加し、約124万円(大韓聖公会ソウル教区からの50万円含む)の献金がありました。献げられた献金は聖公会生野センターのために用いられます。

聖公会生野センター30周年記念パネルディスカッション

「共に生きることの意味」

聖公会生野センター総主事 呉光現

感謝の30年の記念感謝礼拝が恵みの内に挙行されたことを感謝しています。

教区礼拝・30周年記念感謝

礼拝後の第2部として「聖公会生野センターのミッションを語る」をテーマにパネルディスカッションが持たれました。

パネリストは発言順から松原恵美子さん（プール学院教員・堺聖テモテ教会信徒）、井田泉司祭（京都教区・退職）、池住圭さん（中部教区・日韓協働委員）です。

聖公会生野センターの30周年は同時にその前からの聖ガ



「のりばん」でボランテイア体験プログラムにつながっていききました。これは大学に進む前の体験プログラムとして貴重なものになっています。

【井田泉司祭】

日本聖公会でも屈指の日韓関係史の研究者でもある井田司祭に戦前からの聖公会の歴史とその課題「植民地と在日朝鮮人・聖ガブリエル教会」を俯瞰しながら語りました。

聖公会生野センターの母教会である聖ガブリエル教会の張準相師と聖ガブリエル教会の苦難の歴史と復興と聖公会における在日と日韓の歴史を語りました。

松原さんも発言した「出会いin生野」では井田司祭が「日韓教会交流史」を講演し、私が「在日韓国朝鮮人の歴史と法的地位」について語ったことを昨日のように思い出されました。

聖ガブリエル教会の復興と聖公会生野センターの開設は日本聖公会にあって大きな歴史の転換であり、まさに教会が「共に生きる」ことへの大きな一歩であると感じました。

【池住圭さん】

名古屋学生センターは中部教区の社会宣教センターであ

ります。そこを基盤にして中部教区は外国人、特にフィリピンから来た子どもたちのかかわりを大切にしています。国際子ども学校は「就学期」の子どもたちが通うところですが子どもに関わることはその背景つまり、親御さんやその家庭が置かれている状況（地域社会や在留資格等）にも関わります。中部教区

の取り組みの特徴は、教区がその宣教の課題として積極的に関わっていると感じています。国際子ども学校に通う子どもたちのスライドを見ていて「自分が大切にされている場」があることはマイノリティの人たち、特に成長期にある子どもたちにとってはかけがえない場であることを思いながら見つめました。

【最後に】

1時間と短い時間でしたが、青年活動・教育の場・教会と歴史・今を生きる外国人との関わり……。どれもが聖公会生野センターのミッションとは切っても切れないものです。

教区礼拝後にも関わらず多くの方が残ってください感謝しております。

自分とは「違う」他者と生きることは決してたやすいこ

とではありません。人種・民族・文化などが違う人たちが「共にすること」はお互いを知ることからです。マジヨリテイと呼ばれる人たちがそこに心をはせることが大切です。同調圧力が強い日本社会にあって聖公会がそのことから目をそらさずに、取り組み、マイノリティとマジヨリテイが同等の関係性で、社会を、そして私たち教会が歩んでいきたいと思っています。

最後に当日発表された「聖公会生野センター ミッション・ステイトメント 2022」をここに記します。

- ①わたしたちは、小さくされたい人々、弱くさせられていたい人々の声を聴きます。
- ②わたしたちは、イエス・キリストの愛に倣い、共に生きる新しい社会を目指します。
- ③わたしたちは、差別、抑圧、戦争を無くすために働きます。
- ④わたしたちは、多民族、多文化にある人々とつながって生きていきます。
- ⑤わたしたちは、痛みを背負わされてきた人々と共に歩むイエス・キリストの十字架を共に背負います。

解説・宣教協働区・伝道教区とは？

― 教区成立の歴史的背景 ―

②

「宣教協働区」と「伝道教区」設置に至った背景には、聖公会の組織成立時より議論されてきた教区区域の問題があります。聖公会の信仰が日本に入ってきたのは、1843年、英国・琉球伝道団から那覇に派遣されたベッテルハイム医師の伝道が最初で、組織としては1859年に米国聖公会から長崎に派遣されたりギンズ、ウイリアムズ両司祭による宣教伝道を発端としています。その後、英国聖公会からS.P.G.(福音普及協会)とC.M.S.(教会伝道協会)が、またカナダ聖公会からも宣教師が派遣されました。

中部教区はカナダ聖公会、沖繩教区は1945年以降、本土返還されるまで米国聖公会伝道教区。1887年の第1回総会を経て日本聖公会が組織され、さらに1894年の第5総会で6つの地方制度(東京南部、東京北部、大阪、京都、熊本、函館)が確立。1923年には日本人監督(主教)を置く東京と大阪が、初めて正式な教区として成立し、やがて、最終的に沖繩も含めた現在の11教区の形となりました。

それぞれの伝道区域を大雑把に分類すると、北海道・大阪・九州教区はC.M.S. 東北・北関東・京都教区は米国聖公会 横浜・神戸教区はS.P.G.とC.M.S. 東京教区は米国聖公会、S.P.G.とC.M.S.

このように現行教区の成り立ちは、4つの宣教団体の伝道区域を基に展開されたもので、日本聖公会として全体を見渡す視点で定められたものではないかもしれません。各宣教団体はそれぞれの宣教方針と伝統に従って活動を行ったため、多様性に富んではいたものの、個別独立主義の影響が今に残ったと言えます。

(常置委員会)



羊だより

生きづらさを乗り越えよう

最近、私がとても気になっているのは、新型コロナウイルス禍の下ということもあるかもしれないのですが、日本社会に生きづらさを感じている人が多くいるのではないかと、教会の中にも入り込んでいいるのではないかと心配しています。

先日、中高の先生のある研究集会がプール学院でありました。主題講演は内田樹さん(神戸女学院大学名誉教授)でした。内田さんは思想家であり武道家(合気道師範代)で道場も開いておられます。上下関係を作りたくないというので、道場でこういう風にしていくというお話がありました。稽古の始まりには「お願いします」と挨拶をするのですが、師範代から言うのだそうです。それも弟子に言うのではなく、その場におられるハイヤーパワー(超越者)に対して「お願いします。(怪我なく稽古ができますように)稽古の終わりには、「ありがとうございます」と言

ました。高邁な理想(たとえば、ダイバーシティー・多様性の一致)を掲げるとどうしても、上から目線になってしまふ。「人に親切にする」ということとでいいのです。エレベーターで「お先にどうぞ」と声をかけるとか、荷物を持ってあげるとか、電車の席を譲るとかいいのです。そして「敬意」をもって人と接するのです。心の中で、この人も神様によって創造された人として、手を合わせることでいいのです。人間は他者からの敬意を糧に生きていくとも聞きました。

ただ、こうした話をする時、私は自身が「セーフ・チャーチ」のメンバーシップをもっていると思ってはならないと肝に命じています。上から目線になってはいけません。大切なことは、「教会をよくしていこう」、もう少し広げて、「世の中をよくしていこう」という仲間が増えることだからです。

「ありがとうございます」と言いますが、それも師範代が先に行います。そしてその場におられるハイヤーパワーに對して、「ありがとうございます(怪我せず)に稽古ができました)」と感謝するそうです。

「ありがとうございます」「ごめんなさい」「どうぞ」「他者への敬意」こうした心を大切にしていると、私はそこにセーフ・チャーチ、生きやすい社会が生まれてくるのではと考えさせられる講演会でした。

主教アンデレ



さらに内田さんは、「親切」と「敬意」について話されま

『杖ひとつ』

「地域に開かれた教会を目指して」

ヨシユア 田尻 忠邦

大阪聖ヨハネ教会において、高齢化と教勢の衰えは、厳然たる事実です。しかしながら、我々信徒は、時が来れば新たな信仰の仲間を与えられることを信じて、それぞれが、与えられた賜物を生かし、地域に開かれた教会を目指して様々なプログラムを展開しています。

具体的には、第1、第3金曜日にバイブルカフェという聖書の勉強会、毎月第1土曜日には、幼児を対象に絵本の読み聞かせ会を開催しています。また、毎週土曜日の午後には、元音楽教師だった信徒が、近隣の高齢者を集めて、『中大江シンガーズ』を組織して童謡唱歌の指導をしています。さらには、ピアノ教師をしている信徒は、毎週火曜日に幼児、子ども、そして信徒のシニア層を対象にしたピアノ教室を運営しています。今年の春からは、近隣住民を含む絵本の読み聞かせに参加

している親子連れが、ヨハネガーデンと称して、礼拝堂周辺に植栽の空きスペースを活用して花壇づくりや、大型プランターを置いてイチゴやキュウリを栽培する家庭菜園を始めました。春には、チューリップが、夏にはアサガオがきれいな花を咲かせ、イチゴやキュウリの収穫に子どもたちは、興奮しながら舌鼓を打っていました。

このように地域に開かれた教会を目指して、地道な活動を続けています。大事なことは、伝道、宣教と肩肘張ることなく、来訪者には自然体で接すること、「教会に来たら楽しいことがある」、「また来たい」と思ってもらえるプログラムを提供することです。

高齢化が進む当教会ですが、クリスチャンホームの次世代が、イースターや逝去者記念礼拝やクリスマスなど節目となる礼拝には、家族連れ

で参加してくれています。また、子育てが一段落ついた世代も徐々に教会に戻ってきているので、礼拝に常時出席している信徒の役割は若い世代のお手本となる教会生活を送ることだと自覚しています。(大阪聖ヨハネ教会信徒)



第4回大阪教区合同埋葬式報告

11月5日(土) 14時から第4回大阪教区合同逝去者記念式、埋葬式が大東市の大阪霊園で執り行われました。

今回埋葬された逝去者は10人で、聖贖主教会1人、大阪聖三一教会5人、恵我ノ荘聖マタイ教会2人、川口基督教会1名の内訳でした。司式は磯主教、補式は齊藤司祭、内田司祭、小林司祭、柳司祭で、

また、それ以外の時期でも随時個別に埋葬が可能です。生駒山の山頂に近い場所にとっても景色の良いところがあります。霊園自体も出来て間がない新しいところですので、休憩場所やトイレもきれいで、とても落ち着きます。ぜひ一度訪れてみてください。(墓地管理委員会 太田幸彦)

公 示

教主降生 2022年10月22日 日本聖公会大阪教区 教区主教 主教 アンデレ 磯 請久



下記のとおり、人事を発令します。

司祭 シモン 原田 佳城 10月22日付 大阪聖パウロ教会牧師の任を解く。

司祭 バルナバ 小林 聡 10月23日付 大阪聖パウロ教会管理牧師に任命する。

参加者は総勢約40人で、秋のさわやかな日差しのもと、皆さんで静かに故人を偲び、祈ることが出来ました。教区合同埋葬式は毎年11月の第1土曜日14時からと決めて開催し



大阪教区関係教役者
12月逝去者記念聖餐式

12月14日 (水) 10:30~

- 1日 宣教師 エディス・イライザ・ソープ (1930英)
2日 主教 チャニング・ムーア・ウイリアムズ (1910米)
4日 司祭 テモテ 山本 登 (2009)
13日 司祭 ジョン・キャリー・アンブラー (1946米)
16日 司祭 尾形 虎三 (1945)
17日 司祭 アーサー・ラザフォード・モリス (1912米)
宣教師 エミリー・ビショップ・ボウルトン (1926英)
18日 宣教師 ジェーン・キャスパリ (1888英)
19日 司祭 ダニエル 小池 虔二 (2014)
22日 伝道師 清田 海一郎 (1904)
司祭 近重 利澄 (1934)
27日 司祭 ヘンリー・レナード・プレビー (1942英)
28日 伝道師 大塚 惟明 (1928)
29日 司祭 マルコ 伊墻 八束 (1978)
30日 宣教師 オードリー・M・ヘンティー (1970英)

*教役者逝去記念聖餐式は、毎月第2水曜日午前10時30分
から、川口基督教会で行われます。ご関係の有無にかか
わらず、どうぞ自由にご参加ください。

【常置委員会報告】9/28
第15回(臨時)

大阪聖パウロ教会の教会委員との面談を行った。

10/13
第16回(定期)

I. 主教報告及び諸報告

*10/16(日) インターナショナルデー カトリック玉造大聖堂

*11/3(木) 大阪聖三一教会礼拝堂聖別感謝礼拝。

*11月28日(月) 中日本宣教協働区「チャプレンの集い・研修」ZOOM。

【総務局】

・教区報に常置委員会による宣教協働区・伝道教区についての連載を開始した。

【財政局】

・大阪聖三一教会の建築費用の支払いが確定し、返済計画により教区への追加融資額二千五百万円を承認した。常置委員会でも承認し、教区会議案とする。

・2022年度教区費分担金について、今年度は減額を行わないこととした。【連合男子会・婦人会】

・西原廉太主教によるランベス会議報告会を計画している。

・10月10日(月) 開催の教区礼拝・生野センター30周年記念礼拝の振り返りを行った。

II. 協議事項及び主教諮問

*教区成立百周年記念事業準備委員会の組織について、教区会に議案提出することとした。

*伝道教区制についての説明会及び京都教区臨時教区会報告実施について協議し

た。

*教区会へ上程する議案について協議した。

*大韓聖公会との宣教協働について協議した。

*2023年以降人事について主教から諮問があり協議した。

*活動が停滞している牧会支援委員会について協議した。ハラスメント防止委員会として来年度新しくスタートする。

大阪聖パウロ教会の件につき、原田佳城司祭との面談を行った。

10/21
第18回(臨時)

大阪聖パウロ教会の件について協議した。

10/14
第17回(臨時)

大阪聖パウロ教会の件につき、原田佳城司祭との面談を行った。

川口基督教会

(9月11日・75歳) ヨシユア 有田 昌之

教区関係教役者

(9月11日・75歳) 司祭 ヨシユア 高橋 正平

魂の平安をお祈りします

主教巡回予定(12月)

- 4日 聖ルシヤ教会 (創立記念日)
11日 大阪聖ヨハネ教会
18日 川口基督教会(堅信式)
25日 聖ルカ教会

お詫びと訂正

2022年10月503号

○1頁タイトル (誤) 原田光雄

(正) ヨシユア 原田光雄

○6頁5段目 (誤) 坂口 望

(誤) 坂口 望 (正) 坂口 望

11月7日

イザヤ 浦地 洪一

11月17日 宣教師 ガードルード・E・コックス(1906)

お詫びして訂正致します。

受洗 (9月25日)
英語礼拝
ニルセンアリエラ

逝去者 (10月3日・86歳)
石橋聖トマス教会
ナオミ 後藤 眞清